

讀者欄 寄書

僕の天文觀

狹隘な處に澤山の人間が住んで居る爲めでもあらう、一般に日本人は星を愛し星に親しむものが少ない。中には相當な鑑賞眼の持主も其の道のもの以外に可成り有るに違いない。日常我等もたまには星を見る者を見うける。併し彼等の殆んど總ては「星が出てゐるから明日は御天氣！」位にしか考へてゐない。星の存在と云ふ事については恰るで天氣豫報の對象にしか考へてゐないのだから情けなくなる。

觀る眼をもつて見れば星にも心があり魂があるのだが、一寸見には仲々それは判からない。試ろみに五分間でよいから月を見つめてみるがよい。月面の模様が手にとる如く判る事は云ふまでもないが、月の自轉も判るやうな氣がするし、決して月は盆のやうなものではなく、明らかに中空にボツカリ浮んだ球體である事が觀取され、風でも吹けば今にも動き出しさうに見える。是れが月の心であり魂である。

星の光をプリズムに通して分光すればそれに依つて星の溫度を知り、星を生成してゐる種々の元素も知れる。又、其の星が地球に近づきつゝあるか、遠ざかりつゝあるか、距離はどの位あるか？ 其の他、色々な事を知る事が出来る。星の分布を研究すれば宇宙の構造も知れる、宇宙の神祕を發き宇宙は決して無限でない事を知るのも天文學の御蔭である。

我等は天文學を禮讃するが、天文學至上主義論者ではない。學問そのものの價值についての議論は別として、日常我々の氣づかない點で斯程まで我々の日常生活に重要な役割を演じてゐるのである事を認識して新しい眼で見なければならぬ。

天文學ほど難解な學問は他にあるまい。總てが高等な數理の計算に依らなければならぬ。ペラボな數字の羅列が天文學で、わからないのが天文學である。そして最もとりつき易い、萬人に親しまれるのも天文學である。貴

賤貧富の別なく誰にでもふんだんに研究材料を提供してゐる事は天文學の一特長である。實にも我等の研究題目は無盡藏であつて、是非とも我等後輩の手に依つて完成させなければならぬ。

我等三次元世界の動物に四次元世界を認識する事が出来るだらうか？ 誰もが、もしも、斯様な宇宙の神祕を發き得たとしたならば、彼は恐らく天文學に生きる事を人生に於ける最も幸福なるものとして味はう事が出来るであらう。

單に高遠な理論は抜きにして星々の連鎖を追ひ、ギリシャや羅馬の傳説乃至は北歐神話の連想もよからう、織女や牽牛を觀て世界に比類なき七夕の傳説を連想するだけでも興味は津々として盡きないものである。我等は此處に世人が如何に星に對して無關心であるか、其の一例を引用する。

有名な大町桂月氏は我が國の代表的文學者として自他共に許してゐるが、氏の迎妻紀行文を見るに(現文のまい)

「霜さゆる十月の末の星月夜、銀河一道中天を横斷して北斗七星我が頭上に高し、風死したれど寒氣夜のふくると共に加はりて、余は車の上にふるへたり。(中略)われを載せゆく車夫も亦人の子なればとて、夜十二時、勝山町につきて一旅店をたゞき起して車夫と共にやどりぬ。此處は津山を去ること八里、米子まではなほ十六里をあませり。」云々——我等は決して氏の文學上の批判をするものでない。寧ろ我等は師表として仰いでゐるものであるが、時期が十月の末の十二時前後であるから、成る程銀河一道中天を横斷してゐる。然し、北斗七星はどう見なほしても頭上に高く見へる筈はない。大體銀河と北斗七星は正反對にあるもので、是れは少しく星を見た事のあるものは諒解されるのであるが、北斗七星ではなく、「カシオペア座が頭上に高し」とせねばならない。何分明治時代のものであるけれど世人も今少しく星に親しみ、星に對して再認識を希望して止まない。我等はカーライルの老年の歎きを再びしたくない。

1934年5月25日記

大阪にて 草 場 修

(註 長文のため精細なる個處は省略す御容謝を請ふ。——編者)